Die Eiche ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第２ワールドナーシングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

青壮年部「座談会」速報

–将来の協会活動の可能性を確認–

千葉県日独協会創立25周年を記念して、また第二部は日独交流160周年記念行事として、6月19日に青壮年部懇談会をオンラインにて開催しました。

第一部では青壮年部と運営委員15名による「千葉県日独協会の未来」、第二部では青壮年部・見学者12名、ドイツ人ゲスト10名による「日独若者シンポジウム」が実施されました。

座談会に出席したメンバー

懇談会終了後に実施した事後アンケートでは、当協会会員16名、ドイツ側参加者5名から回答をいただきました。

第一部の満足度は「とても満足」11名、「満足」4名、「普通」1名という結果で、良かった点に関しては「みなさんが一言ずつ意見を言うことができる雰囲気だった」、「参加した各会員がどのように今後協会活動をよくしていきたいか端的に知ることができた」、「これまでの活動に無かった新しい発想が提案されていた」、「多くのアイデアが出され、具体化されれば未来につながるものばかり」、「運営委員以外の視点から見てどのように捉えられているのか客観視できた」という声がありました。

第二部ブレークアウトルームでの様子

改善すべき点に関しては「第一部のテーマは運営委員会でも取り上げても良い位の重要テーマで、45分は少々短く感じた。発言者同士のディスカッションがあっても良かった」、「もう少し時間が長ければより深く議論ができた。できるだけ全員が発言できる機会があれば良かった」などのご指摘をいただきました。

第二部参加者全員での記念撮影

第二部の満足度は「とても満足」13名、「満足」5名、「普通」1名という結果で、良かった点に関しては「日本・ドイツからの参加者がちょうど同じ数でそれぞれの側からの意見を聞くことができた。ブレークアウトルームも4人ずつで人数的にちょうど話しやすかった」、「千葉JDGでは従来なかった新しい催しで新鮮だった」、「雰囲気が良くとても歓迎されているように感じた」、「少人数でのディスカッションは面白く、最後の集合写真も良かった」などの回答がありました。

改善すべき点については「ドイツ側も年齢層や職業などいろいろ幅があるメンバーになるのもおもしろいかも」、「アイスブレイクも兼ねて簡単なおしゃべりだけのブレークアウトセッションを設けてもよかった」、「各自の自己紹介＋第二部テーマについてドイツ側から数分のプレゼンテーション等があったら良かった」、「交流に焦点を当てた全体でできるゲームなどがあると良かった」、「予定よりも早くイベントが終わってしまったこともありディスカッションの時間はかなり短いと思った、全員が発言する機会を確保するために時間をより長く設定した方がいい」などのご指摘をいただきました。

今後望む日独交流イベントに関しては「タンデムイベントや季節にちなんだ交流イベント」、「若者懇談会の継続（オンラインと対面両方）」、「オンラインイベントとSNSをつなげる（非公開のLINEチャットグループなど、その場限りにならないように話し足りなかったことを話せたり繋がれたりできるSNSを用意）」、「ドイツ料理店に定期的に集まりシュタムティッシュ」、「時事問題の状況報告及び意見交換」、「独日協会との交流会、他の日独協会との共催イベント」、「ドイツ国内の観光案内所、ドイツ進出日系企業の現地の方、ドイツ在住ドイツ人または日本人とのオンライン会話」、「独から見た交流メリットを備えたイベント。ドイツからみた日本研究に対してこちらが協力などGive and Takeの関係で企画しないと交流の長続きが期待できない」、「旅行や文化などさまざまなテーマでの交流イベントや、講演とそれに関するディスカッション」、「気軽に意見交換ができ新しい友達もできるようなイベント」など、様々なアイディアが寄せられました。

青壮年部懇談会で話し合われた具体的な内容に関しては、創立25周年記念号で改めてご報告いたします。（理事: 竹内 優）

新理事の抱負-理事着任に当たって

2019年4月に千葉県日独協会に入会すると同時に、ボトルシップ研究会の「エーリッヒ・カウルの日記」翻訳の勉強会に参加しました。宗宮好和先生のご指導の下、習志野俘虜収容所に収監された兵士の日記を、当時の背景事情を調べながら翻訳していく作業は、思った以上に大変でしたが、とても面白く、100年前のドイツ人兵士に次第に近づいていくような不思議な感覚がありました。2020年1月には、習志野市役所で「ナラシノの記憶―ドイツ兵たちの記録が語るもの―」という講演会があり、宗宮先生をはじめ捕虜について研究する方々のお話を聞き、その後の懇親会で交流できたことは、とても楽しい経験でした。

2020年4月から理事を務めておりますが、折悪しくコロナ感染が始まった時期に重なり、理事とは名ばかりでまったく会のお役に立っておらず、申し訳ない限りです。

この間はオンラインのドイツ語講習会に参加し、岡村三郎先生のご指導の下、みなさんと一緒にやんちゃな猫が主人公の小説を読むことができました。コロナ禍が収束するまでは、インターネットを活用したこうした活動が重要になると思われます。そのなかで私にできることを模索していけたら、と思っております。（理事：中村孝子）

初めての当協会協力オンライン食文化講演会報告

-オーストリアからマールツァイトー

日墺文化協会主催オンライン食文化講演会「オーストリアからマールツァイト」第３回目が、5月30日（日）午後、（公財）日独協会・千葉県日独協会協力にて開催されました。このイベントは、赤坂のドイツ文化会館にあるドイツ・オーストリア料理レストランMahlzeit(マールツァイト)から、ライブ中継にて、日本オーストリア食文化協会会長飯田シェフによるドイツ・オーストリア食文化にまつわるお話しと、調理方法が実演されるものです。参加者には、お料理のレシピが事前にメールで送られ、また、当日のメニューを実際に楽しみたい参加者には、注文することで予めお料理が配送されます。

Mahlzeit キッチンにて
右:飯田シェフ
左:Mahlzeit 山口シェフ

今回のライブ視聴・録画視聴の参加者は約70名(当協会関係参加者16名)、お料理注文170名分で、過去2回行われた食文化講演会の中で最多人数の参加とお料理の注文となりました。今回のメニューは白アスパラガスのスープ/　ウィーン風ローストポーク・サワークラウト添え/　パン(ブレッツェル・センメル)/　チーズケーキ、どれも魅力的なお料理です。

今回のメニューの一つ
白アスパラガス

1970年にウィーンに渡り、インターコンチネンタルホテル等で修業され、レストランアタシェで料理長として勤務された経験をお持ちの飯田シェフより、ウィーンの有名な場所や豊富な種類のお菓子類、ハプスブルク家が当時愛した食卓、ドイツに関わりの深いお料理や食材が、豊富な資料・写真と併せて丁寧にユーモアも交えてお話しされました。続いての実況では、この季節ならではの白アスパラガスを使ったスープ等、美味しいお料理が次々と完成していきました。講演終了の後、事前に届いたお料理を温め、講演会の様子を思い浮かべながら美味しくいただきました。Guten Appetit！

完成した料理

ドイツとオーストリア、他国の者からすれば非常に似ている両国ですが、例えばウィーンではフランクフルター、ドイツではウインナー、と同じ食材でも呼び名がそれぞれ異なる等、お国柄によって微妙に食文化に違いがあることを改めて感じました。

飯田シェフのお話しの中で、当協会にご配慮いただき「習志野市が日本のソーセージ製法伝承の地」であること、協会設立のきっかけとなった習志野とドイツの関わりについて取り上げてくださいましたことに改めて感謝申し上げます。この度の日墺文化協会との出会いを機に、イベント第四弾が引き続き開催されることを願ってやみません。

（常任理事：本間 実里）

ドイツの街紹介

-Darmstadt-

2015年、大学院在学中に訪れたヘッセン州南部の都市、ダルムシュタットを紹介します。ダルムシュタットはフランクフルト中央駅から電車で約30分というアクセスが便利な場所に位置しており、ドイツ各地からもダルムシュタット行きのバスが出ています。近隣の町としてはマインツ、ヴィ―スバーデン、マンハイム、ハイデルベルクなどが挙げられます。第二次世界大戦での爆撃などで町並みは大きな被害を受けましたが戦後、町の大部分が再建され現在では多くの文化芸術施設や教育施設などを有する魅力的な観光地となっています。ダルムシュタットに訪れた際、まず町の中心ルイ―ゼン広場に行きましたが多くの人や車が行き交っており、賑やかで活気ある町の雰囲気を感じました。

ルイーゼン広場

先ほどダルムシュタットには多くの文化芸術施設があると書きましたが、その中でも特に目を引くのが町の東部に位置する「マチルダの丘」です。マチルダの丘は、19世紀末、芸術の愛好家であったヘッセン・ダルムシュタット大公エルンスト・ルートヴィヒがヨーロッパ各地から芸術家を招聘し造った芸術家村で、ダルムシュタット中央駅からバスに乗り15分程でアクセスできます。芸術家村内では招聘された芸術家達がつくった美しいユーゲントシュティール（アールヌーボー）様式の建築を見ることができ、沢山の芸術・建築ファンを魅了しています。その中でも、ウィーン分離派建築で有名なオーストリアの建築家ヨゼフ・マリア・オルブリヒが設計した結婚記念塔と芸術家コロニー美術館は必見です。結婚記念塔はエルンスト・ルートヴィッヒ大公とエレオノーレ妃の結婚を記念し建てられた塔で、塔内に美しいモザイクを見つけることができます。また、芸術家コロニー美術館には貴重なユーゲントシュティールの工芸品を鑑賞することができます。

芸術家コロニー

ダルムシュタットは先述の「マチルダの丘」が観光スポットとして特に有名ですが、町の中心部に所在するヘッセン州立博物館もおすすめスポットです。ルイ―ゼン広場から歩いてすぐです。博物館と名はついていますが、動物の標本など自然史系展示だけでなく古典美術～現代美術も展示されており見ごたえたっぷりの博物館です。とりわけ、ドイツ現代美術家ヨーゼフ・ボイスコレクション（Block Beuys）は圧巻です。

ベルリンやフランクフルト、ミュンヘンといった大都市と比べると多くの人にとってダルムシュタットはあまり馴染みのない町かもしれません。ですが、町の規模は小さいながらも1日の小旅行では把握することのできない沢山の魅力を持った町だと訪れて感じました。コロナが収束したらぜひもう一度訪れてみたい町のひとつです。

（理事：田中　瑛）

千葉女子高等学校 オーケストラ部演奏会参加報告

5月16日のちょっぴり肌寒い日曜日の午後、千葉女子高校オーケストラ部の「第28回スペシャルコンサート」が開催されました。 同女子校のオーケストラ部には、毎年11月のドイツ軍人慰霊祭で7年前から演奏していただいておりますが、同校にて14年間タクトを振られた山岡健先生の同校での最後の指揮とのことで、金谷会長はじめ杉田副会長他総勢7名（小野、田中、吉田、須古、植松）にて応援に駆け付けた次第です。

いよいよ開演、まずは挨拶代わりのホルストの「木星Op.32」。 勇壮なファンファーレが幕開けを告げ、そして見事な弦と管のハーモニー。 さすが全国大会銀賞に輝く実力に偽りはなく、超高校級の堂々とした演奏と豊かな表現力で、最後まで習志野文化ホールの全聴衆のこころを魅了し続けました。

次は息つく間もなく特別ゲストの亀井聖矢さんのラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」ハ短調Op.18。 まるで中山七里の小説から「岬洋介」が飛び出してきたかのような若き青年天才ピアニストのとても人間業とは思えない躍動感あふれる指使いに賛辞の言葉を探すことすら忘れ、だだじっと聞き入っていました。 そしてアンコールにはなんと「ラ・カンパネラ」！ 一回分のコンサート、得しました。

同オケ部の総合力に疑いの余地はもちろんありませんが、私は個人的には特に弦楽器パートの実力は本物だと思いました。 チャイコフスキーの弦楽セレナーデには鳥肌が立ち(Gänsehaut pur!!!)、カヴァレリア・ルスチカーナ間奏曲は、私を30年前の世界にタイムスリップさせました。 コンサート当日はちょうどソフィア・コッポラ（メアリー）の50歳の誕生日の2日後だったようです。

他にも和太鼓の「稲妻」もスメタナの「モルダウ」も秀逸であっという間の至福の3時間でした。

およそ高校生とは思えぬ、そしてプロのピアニストにも全然負けないパフォーマンスの数々、本当に素晴らしかったです。 今回の成功は、第27回はコロナの影響でコンサート自体が中止となった１年先輩の無念を晴らすべくそして自分たちの高校生活の集大成として、筆舌に尽くしがたい努力の積み重ねの結果だと思います。 一つの目標に向かって突き進む若者たちとその思いに厳しくも優しく寄り添ってこられた山岡先生はじめ陰で支えてくださった皆様に勇気と希望をいただいた一日でした。

千葉女子高校オーケストラ部のますますのご発展と、山岡健先生の新天地でのますますのご活躍を心からお祈りしています 。

（理事：植松 健）

ドイツ駐在時代を振り返って

ドイツと私 – 坂田 博

マスメディア報道等によると、昨今の世界的な環境問題の高まりから、今年9月に行われるドイツ連邦議会選挙において、環境政党である“緑の党（Die Grünen）”が大躍進を果たし、再度、政権の一翼を担うのではないか言われております。

その渦中の党が、西ドイツ連邦議会で初議席を獲得する前年の1982年に、私は証券会社の駐在員として、フランクフルトに赴任し、4年間、駐在いたしました（その間に、当協会志賀常任理事と知り合うこととなりました）。約40年前の日本が‘経済、経済’と言っている中、すでにドイツでは‘環境’に関する問題提起が政治の世界に入り始めており、その先進性に、改めて感心する昨今であります。

私は、1980年前半の日本が国際化の始まりの時代の中、語学力の乏しい人材でも海外に派遣しなければならない時に選ばれた人材の一人であり、昼はOJTで、夜はゲーテ インスティテュートの外国人向けドイツ語コースでトルコ人女性等とドイツ語を学びました。仕事は英語、日常はドイツ語という4年間の間で、ある程度、ドイツ語での生活ができるようになったとは思いましたが、「ドイツ語を読むことができない状況」からの脱出には、厳しいものがありました。その後のスイス チュリッヒでの2年の駐在中においてもドイツ語との繋がりを持ちましたが、ドイツ語読解力の改善もままならず、そこからの脱出の思いは今も続いております。

ローテンブルクまで14ｋｍの標識の前で（著者）

ヴュルツブルク、マリエンベルク要塞

当時は、日本からの来訪客も多くなりつつあり、皆様もご存じのロマンチック街道の中心、ローテンブルクは、フランクフルトから適当な距離にあったことから、よく案内をさせていただきました。ある時のお土産屋さんの店員女性の1言は今でもよく覚えております。

“MARIONETTEN THEATER”（人形劇場入口）

「30年前はアメリカ人が沢山、此処に来た。今、日本人が沢山お土産を買ってくれる。30年後は、何人がここに沢山やって来るのかね？」 フランクフルトの近くには、ハナウという町からブレーメンに至るメルヘン街道もあります。子供に童話の世界を見せたいということでその街道も時々、ドライブをいたしました。その街道の始点であるハナウの近くに、小さな“MARIONETTEN THEATER”があったため、見に入りました。座席は自由席でありましたが、前列の一部は指定席。その席は刻印がされており、その名前を見て、ビックリ。“Professor Dr.〇〇〇〇（日本人名）”。こんな処にも日本人が！という驚きがあったことを覚えています。

人形劇場の舞台

今後、江戸時代後期から現在まで私たち日本人が沢山のことを学んできましたドイツが今後の環境や（日本でも起こりそうな）移民問題を打開していくのか等、当協会での交流を含めて、見聞きできればいいな、と思っています。

日独交流150周年記念菩提樹
その後の成長 No.6
-Ichikawa-

市川市には東山魁夷記念館に2本、里見公園に3本の記念菩提樹があります。

東山魁夷記念館では、2011年10月、記念館正門付近に当時のメトカルフドイツ公使と大久保市長の手によって2本の菩提樹の苗木が植えられました。当協会の名誉会員であった東山画伯ですが、かつてドイツ留学をされたことから、ドイツは画伯にとって、とても思い出深い国となったようです。再び訪れた後にはドイツとオーストリアの美しい風景画を数多く残されました。

8月から同館において「通常展　風景画家　東山魁夷のあゆみII 心象風景」を開催しています（詳しくは下記HPを参照下さい）。ご来館の際には正門付近で一度立ち止まっていただき、そこで出迎えてくれる菩提樹と、ドイツを思わせる建物の外観も併せてお楽しみください。

次にご紹介するのは、江戸川沿いの国府台城跡がある里見公園です。私たちの菩提樹は管理事務所そばの円形花壇の広場に育っています。その横にあるバラ園では、同市が2004年にローゼンハイムとパートナシティ締結をした際、寄贈されたつるバラ「マリア・リサ」（一季咲き）を見る事もできます。

ドイツとの接点が多い市川市です。多くの方に記念菩提樹のことを知っていただけるように、これからも見守っていきたいと思います。

(常任理事： 本橋　緑)

・東山魁夷記念館HP:

https://www.city.ichikawa.lg.jp/higashiyama/

・里見公園HP：

https://www.city.ichikawa.lg.jp/gre04/1111000001.html

書籍/Buch

あるヴァイオリンの旅路 －移民たちのヨーロッパ文化史 －

著者フィリップ・ブロームは、1970年生まれ、ハンブルク出身のジャーナリスト、作家、翻訳家、そして歴史家です。またかつてはプロのヴァイオリニストを目指していた時期もありました。

そんな彼がとある工房で、製作者不明の一挺のヴァイオリンと出会います。「1700年頃のイタリア製、でも作ったのはドイツの職人」と告げられます。ヴァイオリンの姿や音色に魅了されたブロームは、製作者を「ハンス」と名付け、彼の痕跡を探し始めるのです。

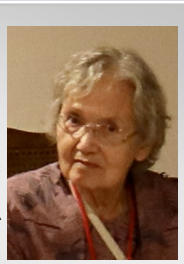
ブロームは、時に鑑定家から意見を尋ねるためにヨーロッパ各地をめぐり、時にはフュッセンやヴェネツィアなどの史実や文化について深掘りします。現代と過去を行き来しながらハンスの足取りをたどっていくのです。著者の経歴ならではの視点や分析により、当時の状況をまるで映像を見るかのように想像することができます。果たしてブロームは時をこえてハンスと出会うことができたのでしょうか。

ノンフィクションベースですが、様々な要素が詰まった魅力あふれる一冊をお楽しみください。

今月の「新理事の紹介」を書かれた中村孝子さんが本書の編集を担当されました

フィリップ・ブローム著　佐藤　正樹訳　法政大学出版局　¥3,740（税込み）（常任理事： 本橋　緑）

訃報



当協会会員の丸山孝士氏夫人のるみいさん（2006年入会、会員No.237）は、６月９日朝に逝去されました。享年88歳。るみいさんは、1923年に北海道庁が、北海道で砂糖大根から砂糖を生産する技術を学ぶ為に選ばれた二人のドイツ人の内の一人フリードリッヒ コッホ氏の孫にあたられます。ご冥福をお祈りいたします。

今後の予定

■オンライン食文化講演会「オーストリアからマールツァイト4」

日時：2021年9月5日（日）
詳細は協会HP、メールにて別途ご案内いたします。

■2021年度オンラインドイツ語講習会を10月（土曜隔週全6回）から開催します。

講師：　岡村三郎先生（当協会理事・早稲田大学名誉教授）

参加費：　会員￥3,500、一般 ￥4,000、学生¥2,000

日程等詳細は、協会HP、メールにて別途ご案内いたします

いまだ新型コロナウイルス収束の見通しが立っていない現在の状況に鑑み、昨年度同様、今回も「ZOOM」ミーティングツールを使用したオンラインでの開催となります。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。「ZOOM」が初めての方、操作に不慣れの方にはご相談に応じて対応させていただきます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

（ドイツ語講習会担当：本橋、本間）

会員情報

法人会員　　医療法人 同和会　千葉病院、社会福祉法人 清和会、（株）京葉ビル管理、（株）和幸電気工事

編集後記

７月15日ドイツ西部で発生した記録的な大雨による水災害に関し、人的、物的災害に見舞われたご家族へ、お見舞いを申し上げます。当協会におきましても目下、その対応について協議を行っております。次回　Die Eicheは、10月発行予定となりますが、千葉県日独協会創立25周年を記念して特別号を発行致します。協会25周年の歩みから、広く会員の皆様からのメッセージを掲載、そして今後の千葉県日独協会の進むべき方向性をまとめております。ご期待ください。尚、今月の通常のDie Eicheの編集についてもここ数年で制作スタイルが変わってきました。即ち、編集委員全員がそれぞれ原稿の執筆を分担するようになりました。また、青壮年部も今月から、偶数月の運営委員会後、青壮年部会を開催、今後の活動の組織基盤を作る動きを始動させます。こうご期待。（勝見 浩明）